

# 地」の「塩

昨年の降誕祭に教会学校の子どもたちは教会からプレゼントをもらうかわりにプレゼントをした。

降誕祭のミサに来られない方に手紙を書き、それを持って、聖体のイエスさまと一緒に訪問するのがある。訪問は希望者のみ。九人の小学生が集まった。大人も協力して三台の車で病院や家庭を回った▼午後一時に聖堂の馬小屋の前に集合。訪問する方についての説明を聞き、幼子イエスさまの前でその方々のために祈りと歌をささげて出発。重い障害をもっている人と彼の看病をする母親、九十七歳になるおばあちゃん、老人ホームにいる

# 地」の「塩

昨年バリアフリーという言葉がよく使われた一年であった。バリアとは障壁のこと。「バリアフリー」とは障壁がないことを意味する▼この言葉はもともと建築の領域で使われた言葉である。高齢者や障害をもっている人を考慮して、そのような人に障壁となるものを取り除き、便利な、段差のない建物を作るのである。そのような建物をバリアフリーの建物という▼神の子が贈られたということは、神と私たち人間が、いわばバリアフリーの関係になったということである。イエス・キリストの誕生によって、つまり、その死と復活によって神と人との間にあるバリア(障壁)が取り除かれたのである。イエスのもとにはさまざまな人が集まってきた。社会から排斥された人、だれからも相手にされない人。また、イエス自身がこれらの人々に近づこうとすることによって神と人、人と人とのバリアを取り除いていった▼キリストの意思を受け継ぐ教会は「バリアフリー」であるはず。神と人との間に、人と人との間に障壁(バリア)のない社会、それが教会である。しかし、教会はまだまだ不完全である。さまざまなバリアがある。六人に一人といわれる高齢者、身体障害者、精神障害者は教会(建物、人間関係を含めて)に大きな障壁を感じている。問題を抱えた人、若者たちも教会と自分の間に距離を感じている。イエスの理想とする「さまざまな人が集う教会」からはまだほど遠い。

新しい年、バリアフリーの教会を目指して一人ひとりが一つ一つの障壁を取り除けるように。

# 地」の「塩

自分の心の望みを手繰っていくと、心の底に「幸せになりたい」という強い望みがあることに気付く。人は皆、幸せになることを望んでいる。幸せになるために生きている、といっても過言ではない。本当の幸せを求めている人は生きている▼さらに心の奥を見つめてみる。幸せになりたい、という望みを支えている、もっと強い望みがあることに気付く。愛したい、愛されたい」という強い望み。心の一番深いところにその望みがある。おそらく一人の例外なく、すべての人はその望みを持っているのではないか。本当の幸せとは、だれかを愛し、だれから愛されることではないか。これなしに、人は生きていけない▼マザーテレサの言葉。「先進国にも、一つの貧しさがありません。それは、お互い同士、心を許していない貧しさ、精神的貧困、寂しさ、愛の欠如から来る貧しさ」と言っている。愛の欠如こそ、今日の世界における最悪の病です。「病気にはそれぞれ特效薬があります。ところが、愛されないが故の寂しさだけは、薬はいやされません」「私たちは、愛し、愛されるために神に創(つく)られました」▼今、社会で起っているさまざまな事件。その根底には「愛の欠如」がある。見せかけの愛、偽りの愛にほんろうされながらも、本物の愛を求めて人は生きている。「わたしが愛したように」互いに愛し合いなさいと、イエス・キリストは言った。そこに本物の愛を見つけた秘けつがある。紀元二〇〇〇年の大聖年を控えて、今、この原点に戻ってみたい。

教会にも回覧板が回って来る。先日、地域の班長さんと一緒に教会の向かいと裏に住んでいるお年寄りの方が回覧板を届けてくれた▼「いつもお騒がせして、何かと迷惑をおかけして对不起」とあいさすすると、「こんどもうございませぬ。神父さん、ここに教会があることに私たちがとても感謝しています」と言葉が返ってきた。「いろいろと大変なことが起っている今、毎週、たくさんの方が教会に集まってお祈りしているのは素晴らしいことだと思います。毎朝、時々、賛美歌が聞こえてくるのですが、とてもありがたい気持ちになります。どうぞ、私たちのためにもお祈りしてください。これからもうよろしくお願い致します」▼毎朝、ミサに参加する人は大体決まっている。ある朝、見かけない方がいた。信者の方ではないようだ。ミサが終わって声を掛けると、いつも朝の散歩で教会の前を通っていて、いつか中に入ってみようと思っていたぞだ。この方は主日のミサにも来るようになった▼「なんじの隣人を愛せよ」という聖書の言葉がある。マザー・テレサは「まず、あなたに一番近い人を愛してください」と言った。「灯台もと暗し」ということわざがあるが、教会ももっと足元に目を向けたら良いと思う。具体的に、地域の活動を大切に、それに参加したり、ミサの前に地域の方々のために祈ることを勧めたり、できることはいろいろあると思う。主日のミサの際に路上に駐車して近隣に迷惑をかけることなどは、ぜひとも避けたいことである。

# 地」の「塩

有能な技師が仕事に追われ、疲れて自殺した。地獄に行ったのだろうか。そんなはずはない、という声が心の中で聞こえる。ずいぶん前のことだが、祖父父母は洗礼を受けないで逝(い)った。地獄に行ったのだろうか。正直に言っていて、どうしてもそうは思えない。心の中で、今もまだ生きている、と感じる▼いろいろな人たちの死に接するとき、救いとは何か、と考えてしまう。受洗の有無で天国か地獄が決まってしまうとは、到底聞えない。こんな本音もんな場で言っているものかとも思うが、その思は否定できない。先の相父母の救いにしても、天国にいののか、地獄にいののか分かる術(すべ)もないが、命の与え主ある神と共に生きていこうと信じてい▼第二バチカン公会議で発表された『教会憲章』の十六番は次のように記されている。「本人のがわに落着かないままに、キリストの福音ならびにその教を知らないが、誠実な心をもって神を探し求め、また良心の命令を通して認められる神の意志を、恩恵の働きのもとに、行動によって実践しよう努めている人々は、永遠の救いに達することがある」個々人の救いについては神祕であり、それについて私たちは云々(うんぬん)することできない。慈しみ深い心である神に信頼して祈るのみである▼長い間、私は死後の世界のこと、考えられていたようなものがする。そうではなく、救いは、今の問題である人は今、救われたいのである。先祖のために祈るこの次期にあつて、今度「キリストの救いの音」について考えてみ

度「キリストの救いの音」について考えてみ